
左右同型靴の史的考察

宇留野 勝 正

人間の足の形は右と左で違っていることは今更言うまでもない。それでその足を保護し、あるいはその機能を阻害せず、むしろ向上させるために靴を着用するのならば当然足の形に沿った型のものでなくてはならない筈である。ところが靴型変遷の歴史では時代によって左右同型の靴が用いられていたり、特殊な場合ではあるが今なおそのような型の靴が用いられていたりすることはまことに興味深い点である。ところで左右差のある靴の誕生、さらに左右同型靴の流行などに関する史的文献はかなり数多く見られるが、その主なものをまとめてみると次のようである。

小学館発行の大日本百科事典の靴の項にはヨーロッパでは18世紀になって大量生産製の工場が出現したが、靴木型が左右の足に対応したようになったのは19世紀初頭からであると記されている。しかしそれならヨーロッパではそれ以前は全く靴の左右差がなかったかというところではなく、ルネ・バウムガルトナー編纂の「足と靴」には次のように記されている。すなわち靴文化の発展を歴史的にたどってみると興味深いのは古代からゴシック時代（12世紀中頃）のシュナーベルシューズまでは左右それぞれの足に合わせて作っていた。しかし16世紀になって初めて1つの靴型で作った左右差のない靴が登場した。ところがその後18世紀にペトルス・キャンパーが「靴の最適

フォームについて」という論文で左右差のない靴の問題点を取り上げ、さらに19世紀になって後述のヘルマン・フォン・マイヤーの「靴の正しい構造」という論文の公表で足に適した靴が注目され始めたのである。それで特にドイツでは1877年に陸軍軍医によって兵の靴にその趣旨が取り入れられ、次いでイタリアとスイスの陸軍もそれを原則とした長靴を採用するようになったというのである。

とにかくドイツでは帝政時代（1861～1918）にはほとんどの市民も左右同型の靴を着用していたが、1914年に第1次大戦が始まり、靴型の研究はさらに衛生的、機能的なものを目指して科学的に進められ、ことに1895年に発見されたX線は大きな貢献をしたのである。

ところでドイツの月刊誌「靴と整形外科」の08年10、11月号に連載で「足箱から靴になるまで」という題目でドイツの整形外科医のブライヤーが靴型の歴史について興味ある論文を寄稿している。ヨーロッパの靴の同型靴からの改善には前記もしたが、1789年にオランダの医師ペトルス・キャンパーの論文に始まり、19世紀に入ってからではあるが、ヘルマン・フォン・マイヤーの意見が大きな影響を与えたものであったと記されている。このマイヤーの意見を早速取り入れてスイスでは軍隊靴を改良したが、それはかつて普仏戦争時に兵が不適靴

のために苦しんだことによるとしている。そしてその改良靴の靴型が1876年のベルリンの展示会に出品され、ドイツ、ロシア、イタリア、などに注目されたというのである。

いずれにしても靴の改善に戦争が関係していたことはまことに興味ある点である。この点に関してもう1つの文献が見られる。スタンダード高等学校の教科書「はきもの」にアメリカでは南北戦争（1861～65）までは靴はまっすぐで左右差はなかったが、その頃から軍靴として左右差が作られ、一般にも広がったと記されている。

さて左右異型靴の出現の時期に関する記事は以上のほかにも見られ、百靴事典・シューフィルには左右の区別がされ始めたのは1850年であるとはっきり記されているし、また市田京子氏は「かわとはきもの」No.93誌にヨーロッパの18世紀以後の婦人靴を紹介しているが、1800年～10年頃は底革の土ふまず部の形にわずかではあるが左右差が見られ、20世紀の靴ははっきりと左右の足に合わせた形で、土ふまず部や踵部が保護されるような靴になり、これは19世紀から20世紀にかけて生活が多様化し、その要求に応じるようになったものであろうと述べている。

またWorld Footwear誌の07年9、10月号には靴の靴型は元来手作り^{なり}で、左右差はなかったが、19世紀になって^{なら}倣い旋盤機ができて左右差のある靴型が作られるようになったので、靴の左右同型靴は消滅したのであると記されている。

いずれにしても以上の文献からヨーロッパでは16世紀から理由はよく解らないが左右同型靴が登場したが、その後19世紀になって足の健康や機能問題に関心が寄せられ、科学的研究に伴って、左右異型靴が復活したと思われる。

ところでわが国の靴はどうであったろうか。わが国の古代遺物として、長野県伊那

市毛良から出土したという土器で長靴のような形をしたものがあるが、もちろん左右差は見られない（三浦豊彦による）。また弥生時代になって、中国からの影響によると思われる金銅の沓が出土しているし、その後奈良時代、平安時代では高貴人はいろいろな靴（浅履、深履、木履、草履、鳥革履など）が用いられていたがすべて左右差は認められない。しかも鳥革履などは現代でも宮中儀式、あるいは神社などで連綿として用いられているが、少なくとも外観的には左右差は認められない。

次に子供靴とくに幼児靴の左右差についてであるが、このことに関する文献は多くはない。まずヨーロッパのことであるが、稲川実氏が「世界のはきものあれこれ」の中でイギリスの1850年代の幼児靴2足を紹介している。1つはピンクキッドの靴で、もう1つはチェーンステッチ刺繍の靴であるがいずれも左右差は見られない。



某宮様御着用の鳥革履（青梅きもの博物館蔵）

一方わが国の幼児靴について商品科学研究所が研究報告書のCORE・42にベビースューズ号として報告しているが、それによると明治37年創刊で大阪児童美育会発行の「こども」という雑誌に洋装の子が、多分輸入品であろうが靴を履いている写真があり、その後明治40年にヨシノヤが開業して子供靴も生産販売したということであるが、これらの靴の状態は不明であると記されている。またその後明治43年4月三越タ



ピックキッドの靴 (14cm)



チェーンステッチ刺繍の靴 (13cm)

イムス・8巻4号に西洋の靴を模倣したのではなく、日本の子供の足を研究して作ったというベルト型と紐編み上げ型の2種類の幼児靴の広告があったということである。しかしこれらの靴もベルトを除いては左右差は認められなかったというのである。しかしその後暫くして昭和15年東京ベビー靴協製株式会社が発足して3種の大きさのベビー靴を作ったが、やはりボタン留めを除いては左右差はなかったという。ところでベビーシューズの底に左右差の区別がつけられるようになったのは先次大戦後アメリカ軍の子供向けに作られたのが初めてとされているということである。

とにかく以上のようにわが国の子供は長い間左右差のない靴を履かされていたわけであるが、わが国の子供は以前は主として下駄や草履を履いていたので、子供靴の改良が欧米より遅れたのは当然のことと思われる。

ところでわが国の左右同型の靴に関して非常に興味ある逸話がある。平成16年5月31日付朝日新聞に陳舜臣氏が「六甲随筆」として明治時代の軍人の靴について、次のような記事を載せている。すなわち「夜間

の非常呼集の演習などには左右兼用の靴があれば兵隊は助かるであろう。左右兼用靴の研究は軍隊で始まったのである。明治15年8月15日の朝野新聞に次の記事が見える。乃木歩兵大佐の多年工夫を凝らして、この頃漸く発明されたる1種の靴は、左右の別なく、これを穿ちて極めて快適を覚え、すでに2、3の士官は親しくこれを試み、従来の靴に比し遥かに便利なことを証されしかば、来月より同大佐の部下即ち東京鎮台歩兵第一聯隊へ一般に之を用いしめることを決定されたりとぞ」と。

しかしこの乃木大佐発案の左右同型軍靴はほとんど役に立たなかったらしい。岸本孝著「靴の事典」(文園社発行)には次のように記してあるからである。すなわち軍人の新型の靴支給は前述のような理由であったが、実際の現場では靴ずれの痛みに悩む兵が相次ぎ、乃木大佐の「名案」はすぐに撤回せざるをえなかったそうであると記してある。しかし乃木大佐発案の左右同型の軍靴があったことは確かで、まことに興味深く、この乃木大佐御愛用の靴は今なお京都市の乃木神社の宝物殿に残されている。

引用文献

- 1) ルネ・バウムガルトナー：「足と靴」、Fuss und Schuh Institut, 2002年
- 2) 「はきもの」の変遷：村島雄一著、スタンダード高等学校編纂、1964年
- 3) 百靴事典・シューフィル：大谷知子編、文久社、2004年
- 4) 市田京子：「かわとはきもの」No93 (1995) No100 (1997)
- 5) 三浦豊彦：「履物と足の衛生」、文化出版局、1978年
- 6) 稲川實z：「かわとはきもの」No43 (1983)
- 7) 大野貞枝：「かわとはきもの」No111 (2000) (日本はきもの研究会ニュースから)